

西村文孝先生を追悼する

長谷川 博

不意に、とある無冠の人のことを語りかけられ、啞然としました。30年前のことです。これが、西村先生とのまったく初めての出会いでした。ちょうど、先生が以前から在外研究をなさっていた大学院研究室へ、私のような者が入っていったばかりの頃でした。

その私が今は、御奥様からお預かりした御遺影を前にしています。いったいゼンたい「こんなことってあるものか」と思っています。憚らずにいえば、西村先生、あなたは、学者の世界において私がそう悼む3人目のお方です。

20年前には、忘れるはずもないご恩威を戴いた。そのときのことについては、ワイクの言ったある言葉に突きあたるのだが、絡まるものが、2人の間をこえていたというほかはない。私が千葉商大に来てからは4年と経たない間のお付き合いでしたが、そんな私に「遠回りしていたのか」と仰るわけもなかった。だからでしょうか。国境の長い隧道を抜け、ここにいることが、私には自然に感じられます。

けれども悔やまれます。旅立たれてしまっは、過去のそんなことだけではないあれこれのことどもを、もう語り合えないじゃあないですか。

悲しめば涙するように、人は感情や思考や記憶をもっているのではなく、それらをするのであり、心の中にある気持ちと考えられているものを、人と人との間の行為に置き換えてみたくになります。ある人の行為は、必ずある関係の構成素であって、それまでの関係の歴史や、その行為が向けられていく関係をも含んでいます。心にまつわる言説を行為として扱い、行為を関係の中に埋め込むことによって、心に関するすべての語彙は、関係によって関係の中で構成されたものだと考えられるようになります。社会的な関係を通じて、閉じる心がつくりだされるわけでもなく、社会的な外部世界がいかにして個人の主体的な内部世界に入り込んでくるのかをも考える必要はありません。

心と呼ばれる独立した孤立した領域などないのです。あるのは行為であり、その

行為は関係の中で生成され、関係を通じて人々にとって理解可能なものになります。考えるということは、決して心の中の私的な出来事ではなく、私たち自身が思考や理性を、人々の発話や行為に基づいて人々に帰属させているということなのでしょう。

いまや空しくも、この問いかけだけは、天空の西村先生に届いて欲しい。「以上のように思っていなかったのですか。否、そういうものだと分かっていたのですか」。

さても、西村先生の博士論文原型を主査教授の研究室で手に取らせて頂いたときの重みの感触さえもが、まだこの手には残っております。これに尽きない先生のご業績のご貢献は、ヒーラ細胞が本人の死後も世界中の研究室で研究されつづけているというのであれば、まして況や。

先生には、研究と教育で努力を積み重ねたという自負がございました。

合掌